

兵士たちは何を読んだか —読書の歴史を問う研究の可能性

中野 綾子

近代日本における戦時下の文学や作家をとりまく通俗的なイメージに、言論統制によって厳しく抑圧されていたというものがある。たしかにそのイメージは正しくもあるが、そうした抑圧のみで戦時下の文学を考えることもできない。アジア太平洋戦争下において、日本文学が戦争と具体的にどのように関わりあっていたのかを考えることも必要であろう。なかでも著者は、兵士と読書の関係性に着目することで、戦時下の文学の問題について考えてきた。今回の研究報告会では、こうした研究のなかでも慰問雑誌文化について紹介をおこなった。

兵士と読書を結ぶ典型的イメージとして、学徒兵の次のような例がある。「学生兵にとって辛かったことの一つは、軍隊内で自由に読書ができないことであり、陸軍では書物をいっさい許されぬ場合が多く、海軍でもある種の本（武士道を説いた『葉隠』）のみ携行がゆるされるという状況」であったというものである（日本戦没学生記念会編「注釈」『新版きけわたつみのこえ』岩波書店、1995）。このような過酷な状況での許されざる読書を行う学徒兵のイメージが流通する一方で、そのほかの兵士がどのような読書を行っていたのかについてはほとんど語られてはこなかった。

たとえば、1937年の開戦と共に慰問図書を送る活動がおこなわれている。文学者で先陣を切ったのは、報道記者として従軍した木村毅である。木村は帰還後、すぐさまに「前線文庫」として戦地へ書物を送る活動を呼びかけ、それに反応した菊池寛ら文芸家協会によって、その試みは実現することとなった。それは、木村が指摘したように「前線の将士に読書の要求のある」ことを、出版業界、文学者、軍部へと知らせることもなった（木村毅「前線文庫を送れ」『東京日日新聞』夕刊、1937.8.20）。

こうして兵士が読者として認識されると、出版社をはじめとして慰問活動がおこなわれていく。なかでも大規模なものに、陸軍の要請による大日本雄弁会講談社の『陣中倶楽部』と海軍の要請による興亜日本社の『戦線文庫』がある。これらは日本国内にて編集印刷ののちに、軍を通して中国前線地域へと配布された。そのほか、岩波書店が陸軍の要請により岩波文庫を2度にわたり供出するなど、組織的に戦地へと書物が届けられていく（『岩波文庫総目録1927-1987』岩波書店、1987.7）。さらには、こうした兵士専用としての雑誌や書物だけではなく、一般誌や青年雑誌、少女雑誌、婦人雑誌などが、「慰問特集号」を組み、「前線へ送りましょう」と呼び掛けがなされていたのである。

そもそも、大正時代からすでに日本語書物の流通網は外地へと進出をし、朝鮮、満洲、台湾などで、新刊書店や古書店が営業をおこなっていた。戦時下においては、さらなる進出が目指され、1941年には「出版新体制」とも呼ばれる日本出版文化協会および日本出版配給株式会社の設立により、書物の一元配給が実現されていく。1943年には、日本語書物の流通のために南方へも出張所の設置が決定する。こうして、兵士は送られる書物だけではなく、進出した書店においても書物を手に入れる環境が整っていたのである。

なぜ兵士へ書物は届けられたのであろうか。まずは出版社側の商業的な要因がある。たとえば、

大日本雄弁会講談社は社内報にて、たびたび中国戦線にて『キング』や『講談倶楽部』が売れていることをアピールし、宣伝文句へと転用していく。また、文芸春秋社などでも、臨時増刊号として「慰問特集号」を刊行する。それは、「慰問特集号」制作に伴い、印刷用紙の増配がおこなわれたこと、また慰問品として売れ行きの増加が見込めたことが背景にある。つぎに、第一次世界大戦での戦勝国の事例を参考にしていたことも考えられる。大日本雄弁会講談社は、1938年に『精神弾薬の威力 欧州大戦と雑誌読物の調査』というパンフレットを作成し、そのなかで、先の大戦における兵士の読書を調査している。戦勝国ではどのような兵士の読書がおこなわれていたのかが、まとめられ、各出版社において共有されていたのである。さらには報道部においても、同様の見解が開示されることになる。

このように、兵士へ書物を送る慰問活動は、文学者や出版社、一般市民を巻き込みながら行われ、銃後から前線へと書物が届けられた。佐藤卓己は『キングの時代』（岩波書店、2002）のなかで、『キング』が「読書の一般化、普遍化」を後押しし、さらに戦時下における市民の「国民化」に貢献したことを指摘しているが、前線と銃後を繋ぐ慰問雑誌は、前線と銃後を象徴的に繋ぐメディアとして、異なる読者層を持つ様々な雑誌を「国民の読物化」することとなったのではないだろうか。それが、実際にどのように読まれたのかはまた今後のさらなる調査が必要となる。